That's Collaboration: NII-Museum

連想検索と充実したコンテンツで情報の価値を高める

必要な情報をしぼりこむための通常の検索と違い、情報を広げていくのが「連想検索」。情報発信技術の向上とコンテンツの充実、博物館・美術館などとの連携が進み、連想検索機能をもった「文化遺産オンライン」などのサイトが大きな広がりを見せている。

丸川雄三
Yuzo MARUKAWA
連想情報学研究開発センター
特任准教授

美術品や建造物などの文化財を気軽に楽しみたい。そんな人におすすめなのが「文化遺産オンライン」(図1上)である。詳しい説明はさておき、まずは使ってみよう。

トップページの一番上に「時代から探す」とある。今年のNHK大河ドラマにならって、安土桃山時代を選ぶ。すると画面には書状がたくさん並ぶ。その中に2つだけ焼き物がある。両方にチェックを入れて連想検索ボタンを押してみると、期待通り瓶(へい)や壺が現れる。だが、1つだけ竹製のものがある。その詳細を見てみる。

図1 文化遺産オンライン
(http://bunka.nii.ac.jp/)
日本全国82カ所の博物館・美術館から提供された約5000件の収蔵品が、Web上で楽しめる。文化庁の国指定等文化財データベースが網羅されている。2008年3月26日から正式公開版の一般公開が始まった。

これは千利休の作品だ。「伊豆韮山の竹で作った」とある。続いて関連作品の中で、利休の「竹茶杓(たけちゃしゃく)銘 泪(めいなみだ)」が気になる。単なる茶杓のようだが、説明文には「(豊臣)秀吉に切腹を命ぜられた千利休が、自からこの茶杓を削り、最後の茶会に用い…」(図1下)。なんと、利休の最後の作品であることがわかる。

こうして連想をつなげてどんどん情報をたどっていくと、気軽に入ったつもりが思いがけない情報に出会い、つい引き込まれてしまう。これが「連想検索」である。

連想検索コンテンツの充実

NII連想情報学研究開発センターの丸川雄三特任准教授はいう。「文化遺産オンラインの連想検索は、通常の絞り込む検索とは違い、or検索にやや似ています。それぞれの作品名や説明文などの単語のつながりから類似度を計算し、スコアの高いものから順に検索結果を表示しています」。連想検索の目的は、「ユーザーに新しい出会いときっかけをもたらすことです」と丸川准教授。そのため文化遺産オンラインは、専門的知識がなくても作品を見つけられ、楽しめるような工夫がしてある。

まず、作品名や作者がわからなければ何もできないようでは困る。時代、分野、地域など、初心者にもわかりやすい分類で入りやすくできている。それに写真だ。すべての作品には必ず写真が付いている。各博物館や美術館にデータ提供を依頼するとき、写真付きでとの条件をつけた。写真の威力は大きい。しかし、先ほどの利休の例にあるように、文字情報も重要である。もちろん、初心者だけが楽しめても仕方がない。文字情報だけの作品も含む「文化遺産DB(データベース)」を備えているので、より深い調査も可能だ。

図２ 国立美術館遊歩館
(http://search.artmuseums.go.jp/yuuhokan/)
管理しやすい分類と見せやすい分類とは違うという意識のもと、電子企画展支援システムとして考案された。

連想検索は、Web 上での情報発信技術とコンテンツがあってはじめて実力を発揮する。丸川准教授は「その３つの要素がかみ合うことで、新しい価値を生み出すことができます」という。コンテンツの重要性はいうまでもない。文化遺産オンラインは、東京国立博物館、国立美術館をはじめ、全国の博物館・美術館の全面的な協力により成り立っている。

連想検索を行動指針の1つに

連想検索はこれだけでは終わらない。丸川准教授は「情報は、人間の行動に影響を与えてこそ意味があると私は考えています。連想検索で頭の中を揺さぶって、次の行動の助けになればいいですね」という。

「竹茶杓 銘 泪」の続きで、今度は「想 IMAGINE」ボタンを押すと、文化遺産オンライン以外の 15 のデータベース (*1) を含めた横断検索が可能になる。すると、「新書マップ・テーマ」(*2) からは『千利休 無言の前衛』(岩波新書、1990 年) が見つかる。利休の作り出した侘び・寂びの世界について書かれたエッセイのようだ。「るるぶ・国内観光情報」に目を向けると、利休の最期にゆかりの京都の一条戻橋への旅行プランが表示される、といった具合だ。「文化遺産オンラインのユーザーには、Web 上で楽しむだけでなく、最終的には博物館・美術館に行って直に見てもらいたいと思っています」と丸川准教授。行動の指針を示すことができればという連想検索の、まさに目指すところである。

情報の価値をさらに高めたい

NII 連想情報学研究開発センターが関わるサイトは、ただ見栄えが良いだけではない。たとえば「国立美術館遊歩館」(図 2)。これは、所蔵品を「気軽に感覚的に楽しめるように」(丸川准教授) 作られたサイトだが、2008 年のグッドデザイン賞 (*3) を受賞している。NII 連想情報学研究開発センターから同時に「想 -IMAGINE Book Search」と「神保町へ行こう」も受賞しており、システムや使いやすさを含めたトータルデザインが高く評価されている。

「日本各地にはまだたくさんの文化財があります。データの受け皿は用意しましたので、地方自治体などの積極的な情報発信を期待しています。そのためには、文化遺産オンラインへの登録がメリットと思ってもらえるサイトにしていかなければなりませんね」と丸川准教授。もちろん、課題もある。著作権の問題だ。インターネットの普及により、著作権を取り巻く状況は大きな変化を余儀なくされている。この点は「状況の変化に遅れずに対応していく」しかないという。

もともと文化財に興味があったという丸川准教授は、「人間活動に関わるものを広い意味でのアートととらえ、いずれはそのすべてを網羅したい」と語る。その動きはすでに始まっている。例えば、文化遺産オンラインに人文系のデータベースなどを加えてパワーアップした「想 -IMAGINE Arts」。丸川准教授は「今年中には公開したい」と意気込む。

連想検索を端緒に、全国の博物館・美術館からのコンテンツ提供を受け、「情報の価値を 10 倍にも 20 倍にも高められる環境を提供したい」という丸川准教授。その望みは徐々に実りつつある。

(取材・構成 吉戸智明)

(*1) ほかに、古本屋、書店、また Wikipedia などもある。

(*2) 連想情報学研究開発センターで、現在手に入る限りの新書 11,000 冊を揃え、データベース化した。新書全体から 1000 のキーワードを拾ってカテゴリー分けし、それぞれ読書ガイドも付記してある。新刊は追加され、読書ガイドも改訂していく。

(*3) 主催は財団法人日本産業デザイン振興会。「優れたデザイン」を社会に普及させ、生活の豊かさと産業の発展を後押しするねらいのもと作られた賞。

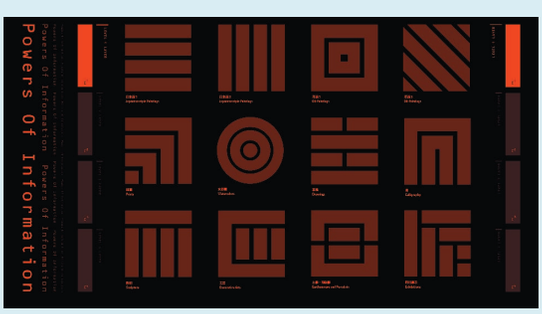

図３ Powers of Information(http://rensou.info/poi/)
国立美術館、東京国立博物館との連携による電子企画展サービス。12 のカテゴリーからスタートし、さまざまな作品の高精細画像を見ることができる。音にも注目。